



コルテス 伊藤の我が音楽人生

第5回 音楽漬けの青春 二十歳の巡り会い

こんにちは。いつも、読んでいただきありがとうございます。
今回は、一番遊び呆けていた20歳前後の音楽との関わりをお話させていただきます。

予備校通いの青年は、授業をさぼってはレコード店に入り浸り、中古レコードをあさり、喫茶店で友人と音楽談義。そんな毎日、コンサートもJAZZ、ROCKと交互に行き、夜はJAZZ喫茶で閉店まで。お金が底をつく、参考書を買いたいと定番の嘘をつき、親からお金をいただいでは音楽人生に投入しておりました。当然のことながら食費は切り詰めすべてレコード、チケットに。

質屋経験もこの頃からありまして。何という青春時代だろうと今思うと懐かしさより、呆れの方が上ですね(笑)。

巷でよく流れていたのは、「危険なふたり」(沢田研二)、「あなた」(小坂明子)、「浮世絵の町」(内田あかり)でした。酒飲みを覚えたのもこのころですね。ビアガーデンにも行きました。

池袋のビルの屋上、「花街の母」かけてまして笑ってしまいますね。

JAZZ喫茶は、とにかく暗く、陰湿な感じ(笑)。私語厳禁は当たり前で、かなりの音量でCOLTRANEがかかってましたね。私は中野、新宿、小岩あたりのJAZZ喫茶によく出入りしておりました。煙草の煙で酷い状態、今では考えられませんね。ROCKよりJAZZにのめり込んでいくのもこのころで、未知の音楽への関心は高まるばかり、しかしながらJAZZのコンサートは行きましたが、我ながら意外とオーソドックスなコンサートを選択していたのは今でも疑問です。ケニー・ドリュー、カーメンマクレエ、デクスター・ゴードンですからね。



AUDIOは当時はSONYのプリメインアンプ、SONYのプレーヤー、安いやつ。しかしスピーカーはJBLのL-40。清水の舞台から飛び降りる気持ちで借金して購入。これで、JBLには魅かれましたね。そしてその後、4344、4350と経緯していく訳です。SWING JOURNALなる雑誌がありまして、JAZZとAUDIOの両面から深く紹介していく内容で妙に大人になったような気がする本でした。ROCKはNEW MUSIC MAGAZINE だけでしたね。これもマニアチックな雑誌で愛読しておりました。

話は変わりますが、この頃からレコードの音の違いが何となく気になりまして、輸入盤のほうが国内盤より確かに良い音でとりわけイギリス盤のクオリティーの高さは格別でした。

アメリカ盤もやはり国内盤より優れてまして、JAMES TAYLOR、CARLY SIMON、DOOBIE BROTHERSなどは今聴いても格別です。ジャケットの質感も三者三様でこれまた面白いものがありましたね。

レコード店通いの青年にさらなる、カルチャーショックがあったのもこの時期。いつものようにレコード店であさっていましたが、バックミュージックにとっても素晴らしい音楽がかかっている、透明感のあるギター、美しいピアノ、リズム隊もきまってるなんて素晴らしいだろう。一体このバンドは?ギターは?ピアノは?店員さんに訊きました。この音楽は誰ですか?

店員さんは、PAT METHENYというギタリストでサンロレンソという曲だ、と教えてくださいました。私と同じ年の彼は素晴らしい才能の持ち主で、今後の私を色々な方向に導いて行くことになります。そしてAUDIOも更なる発展をさせていくことになったのが、PATとの出会い。そしてWEST GERMANYのECMレコードとの出会いでありました。

今回は、FUSION、AUDIO 地獄への招待状と中身は濃くなっていきます。お楽しみに。
(ひたちなか市 伊藤歯科医院・伊藤輝彦)